

万所(まんじょ)遺跡

現地説明会資料

—伊勢市辻久留3丁目—



墓4 青磁碗ほか遺物出土状況

平成22年8月7日(土)

三重県埋蔵文化財センター

1. はじめに

平成16年9月 28～29 日にこの地を襲った台風 21 号がもたらした記録的豪雨は、宮川の水位をかつてないほど押し上げ、特に横輪川より下流右岸の地域で床上・床下浸水あわせて 200 戸を越える甚大な被害をもたらしました。この対策として国土交通省では緊急の水害対策を実施することになり、度会橋より上流右岸には大洪水でもあふれることのない堤防を築くこととなりました。

三重県教育委員会では工事に先立ち、予定地内にある文化財(史跡や遺跡)の保護について、平成 17 年度以降国土交通省と協議を重ね、対策事業の円滑な推進との調整を図ってきました。事業も最終段階に近づいてきた平成 21 年4月、事業予定地に残る万所遺跡の一部について第1次調査を実施したところ、古代を中心とする建物跡などの遺構と土師器・須恵器などの遺物が確認されたため、緊急発掘調査を実施し、記録として永久保存をはかることになりました。

発掘調査は平成21年夏に A・B 地区を実施し、今年度は C 地区を実施しました。調査にあたっては国土交通省三重河川国道事務所・宮川出張所をはじめ、伊勢市教育委員会など関係諸機関および地元自治会のみなさまより多大のご理解とご協力をいただきました。あつくお礼申し上げます。

2. 万所(まんじょ)遺跡の位置と周辺の歴史的環境

万所遺跡は宮川の下流域右岸の川岸に立地し、伊勢市辻久留3丁目に属します。弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡として知られていましたが、県道伊勢・南島線より北(宮川)側に東西 320m、南北 90m の広がりを持つ広大な遺跡です。

遺跡のある場所は河岸段丘(かがんだんきゅう)と呼ばれる台地状の地形となっています。標高は 11m と周辺の川岸では最も高く、宮川の川岸であるにもかかわらず、川床と調査地とは約9m の崖でへだてられており、水害の危険が最も少ないところです。このように、原始・古代の人々は生活の知恵として、水害の被害から少しでも逃れることのできる場所を知っていました。

さて、母なる川・宮川の流域には、古くは約2万年前の氷河時代(旧石器時代)から人々の暮らしの跡を物語る遺跡が点々と残されています。万所遺跡の周辺では佐八町の佐八藤波遺跡、津村町の元新田遺跡、玉城町の上地山遺跡、小俣町のママ田遺跡などがあります。

氷河時代を生き抜いた人々は、1万数千年前に始まり2千数百年前まで続く縄文時代にも流域に足跡をたくさん残しています。主な遺跡として右岸側では度会町の下久具万野遺跡、森添遺跡、佐八藤波遺跡が、左岸側では度会町の上ノ垣外遺跡、玉城町の明豆遺跡などがあります。いずれも大きな遺跡で、宮川の豊かな恵みが狩猟・採集生活を基盤とした縄文の人々を育んだのでしょう。

2千数百年前には大陸から稲作文化が到来し、弥生時代の幕が開きます。周辺には磯町の大藪遺跡や倭町の隠岡遺跡のほか、小俣町の掛橋遺跡、野垣内遺跡、中楽山遺跡など、汁谷川を臨む台地上に弥生時代の終わり頃からの大遺跡が連なり、弥生時代以降は左岸側に大きなムラが栄えたことを物語ります。

古墳が作られる4世紀から7世紀にかけて、松阪市の宝塚古墳のような前方後円墳に代表される大きな古墳は当地では築かれませんが、地域の有力豪族の残した古墳があります。主な古墳として初期の群集墳である津村町の落合古墳群、磯町の丁塚古墳、小型の前方後円墳である上地町の野田古墳や、外宮神域の高倉山山頂には全国有数規模を誇る横穴式石室をもつ高倉山古墳などがあります。

平安時代の遺跡は、御園町の高向 A・B 遺跡や倭町の隠岡遺跡、小俣町の離宮院などがあります。平安時代から鎌倉時代にかけての遺跡としては、神宮祭主藤波氏の館があったとされる佐八藤波遺跡や、対岸の玉城町岩出にはおなじく神宮祭主であった大中臣氏の館があったとされており、蚊山遺跡がこれにあたると思われます。また、津村町の中ノ垣外遺跡もこの時期の大規模な集落が発見されています。

このように、当地周辺では連綿と人々の暮らしが続いてきました。時には牙をむいて人間に水害などおそろしい被害をもたらしますが、常に豊かな恵みを与え続けてくれたのが宮川でありました。そのことを私たちに教えてくれるのが今に残された遺跡の数々なのです。



万所遺跡周辺(国土地理院発行 25,000 分の1地形図より)

3. 調査で見つかった遺構(生活のあと)

① 掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)

掘立柱建物1は調査区の北部で見つかりました。東西3間(6.4m)、南北2間(3.8m)の東西棟の建物です。柱を埋めるために掘られた穴は40~60cmの大きさと、埋まった土の中から土師器(はじき)と呼ばれる素焼きの土器が出土しました。平安時代中期(約1,100年前)と考えられます。

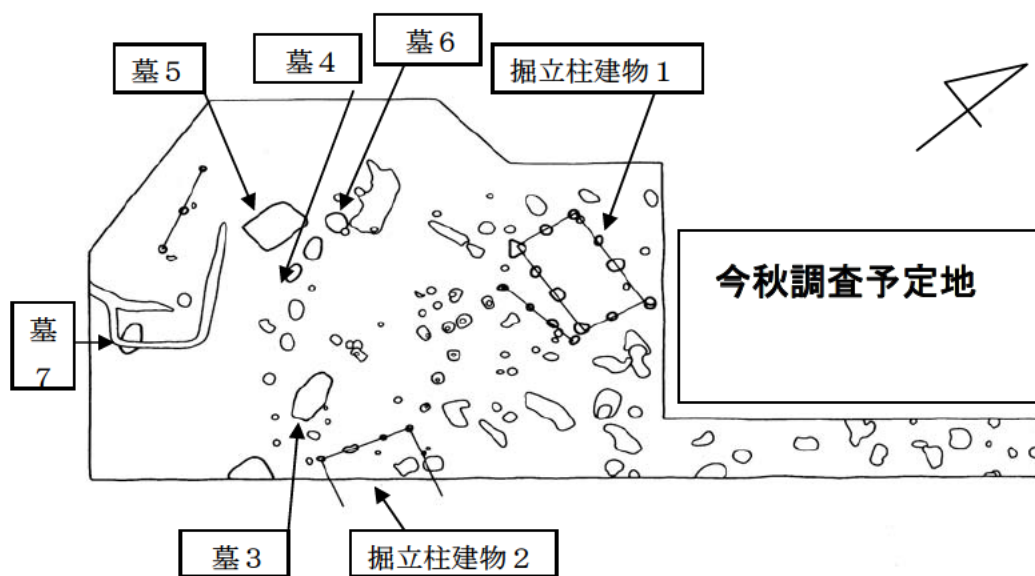
掘立柱建物2は調査区の中央部付近で見つかりましたが、大部分は東側の調査区外へ広がるため全容は不明です。西側の南北(5.2m)3間分の柱穴が見つかりました。柱を埋めるための穴は直径が約30cmと掘立柱建物1にくらべると小さいもので、建物1より時代が新しく、鎌倉時代前半(約700~800年前)ころと思われます。



掘立柱建物1(南から、四隅の柱穴に人が立っている)



掘立柱建物2(南から)



遺構平面図略図

② 墓

平安時代末ころから鎌倉時代にかけての墓と推定されるものが5基みつかりました。いずれも人骨は残っていませんでした。したがって墓であることの決定的な証拠はなく、今までの類例から推定したものです。したがって単なる土坑(大きな穴)の可能性もあり、今後詳しく検討していきたいと考えています。

墓3は東西 1.6m、南北 3.2m で中央部付近でややふくらんだ隅の丸い長方形をしています。遺構の深さは 10cm 程度と浅く、ほとんどが後世の耕作などで削られてしまったものと考えられます。この遺構からは完全な土器は出土しませんでした。土師器の甕(かめ)や山茶碗(やまじゃわん)と呼ばれる陶器碗などが大きな破片で出土しました。鉄釘(くぎ)が出土していないことから木棺は使われなかったと思われ、伸展葬(しんてんそう)の土坑墓(どこうぼ)かもしれません。出土した土器から約 900 年前の平安時代末期と考えられます。

墓4は縦 1.2m、横 0.8m の楕円形の墓です。お供えの土器として中国製の青磁碗(せいじわん)1個、山皿(やまざら)と言われる陶器の小皿2枚、土師器の小皿1枚が完全な形で出土しました。

この青磁碗は、龍泉窯系青磁碗(りゅうせんようけいせいじわん)で、12 世紀後半から 13 世紀前半頃に杭州の地で作られ、貿易で日本にもたらされたもので当時は貴重品でした。このような完全な形の貿易陶磁器を副葬した墓は非常に少なく、三重県内でも今までに数例しかありません。したがって、この墓に葬られた人はおそらくこの地域の有力者のひとりであったと考えられます。

なお、穴の大きさが小さいことや釘が出土していないことから木棺を使用したものではなく、屈葬(くつそう)の土坑墓であったと思われます。

埋葬時期は、青磁碗と同時出土した陶器皿(山皿)の年代から、約800年前の平安時代末期から鎌倉時代はじめにかけてのころと考えられます。



墓3



墓4



墓4 遺物出土状況



墓4 出土遺物

墓5は墓4の北西 1.7m に位置し、東西 2.3m、南北 3.2m、深さ 0.4m で隅の丸い長方形をしています。この遺構からは完全な形の土器はありませんでしたが、墓4と同じ時期の土師器や陶器が出土しました。ほかに棺釘と考えられる鉄釘が出土しているので木棺が使用されたものと考えられます。埋葬時期は約 800 年前の鎌倉時代はじめ頃と思われます。

墓6は墓5の北東に隣接して見つかりました。縦 1.6m、横 1.1m の略楕円形をしています。山茶碗の底部が1点出土していますが、墓と推定できるものではありませんでした。時期は平安時代末期から鎌倉時代ころと思われます。

墓7は調査区の最も南西側で見つかりました。東西 1.2m、南北 1.8m の隅の丸い長方形をしています。深さは約 0.6m で、中央部底付近から土師器の小皿が数枚出土しました。棺釘と思われる鉄釘も出土しています。時期は鎌倉時代と思われます。



墓5



墓7

4. 調査で見つかった遺物(生活の道具)

① 縄文土器

この地域では最古級(約1万年前)の大鼻式(おおはなしき)と呼ばれる土器が1点

ですが出土しました。これに続いて約 7,000 年前のもの(土器の粘土に繊維を混ぜ込んで焼いた土器)と、内外面を二枚貝などの端を引きずってできた筋状の線が残る条痕文(じょうこんもん)と呼ばれる土器、細い竹や棒で楕円形や羽条の線を描いた約 4,000 年前の山の神式(やまのかみしき)と呼ばれる土器が出土しました。

② 弥生土器

約 2,200 年前の弥生時代前期の末から中期初頭のもので、煮炊きするための甕(かめ)の破片が1点だけ出土しました。



大鼻式土器(約1万年前)



繊維混土器(約 7,000 年前)



山の神式土器(約 4,000 年前)



弥生土器(約 2,200 年前)

③ 平安時代から鎌倉時代の土器

約 1,100 年前～約 800 年前のいろいろな土器がたくさん出土しました。素焼きの土器である土師器(はじき)では杯(つき)、皿(さら)、甕(かめ)、移動式カマド、製塩土器などがあります。その他の土器として志摩式製塩土器と呼ばれる特殊な土器があります。

陶器については、灰汁を釉薬(うわぐすり)に用いて焼成した灰釉陶器(かいゆうとうき)の碗、釉薬を用いずに焼成された山茶碗と呼ばれる陶器の碗と、それを小型にした小碗、高台を失って小皿の形態に変化した小皿(山皿と俗称)があります。



土師器(平安時代)



陶器(山茶碗・山皿)

まとめ

昨年度から今年度にかけて、広大な万所遺跡の一角にはじめて発掘調査の鍬が入り、遺跡の内容の一部が明らかになってきました。以下に遺跡の移り変わりを年代順に追ってみましょう。

- ① 縄文時代の初頭(約 10,000 年前)にはじめて人の活動があった。続いて約 7,000 年前、4,000 年前にもこの地に暮らした痕跡を発見。遺物の出土のみで、多くは流失している。また、移動生活中の一時的な住まいの場であった可能性も高い。
- ② 弥生土器が1点のみだが出土した。米作りには向かない場所。
- ③ 平安時代中期(約 1,100 年前)にはじめて建物が建てられ、以後鎌倉時代の初め頃まで近隣に集落が営まれ人々の暮らしが続いた。
- ④ 地形的に見ると宮川の川岸に近いので、集落の中心は調査地よりも東～南にあったと推定される。(調査地は集落の縁辺部)
- ⑤ 平安時代末期～鎌倉時代(約 900～800 年前)には、一部の場所が墓地となった。

今回の調査地は川岸に近いことから集落の縁辺部と考えられます。したがって中心部はさらに東～南側にあるものと推定されます。出土土器のうち平安時代中期の土師器杯・皿は明るい橙色をしており、明和町の斎宮跡から出土するものと同じものです。これは斎宮周辺で多数みつがっている土師器の焼成窯で焼かれたものと同じで、神宮にも納入されていたと考えられ、万所遺跡も神宮や斎宮となんらかの関わりのあった遺跡ではないかと思われれます。当該時期に各地に増加する御園もしくは御厨のような性格を有した遺跡であった可能性も考えられます。今後、詳しく検討し遺跡の性格を明らかにしていきたいと考えています。

調査原因 宮川床上浸水対策特別緊急事業
調査期間 平成 22 年 5 月 28 日～8 月 20 日
調査主体 三重県教育委員会
調査協力 伊勢市教育委員会

調査委託 国土交通省三重河川国道事務所
調査面積 700 m²
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅱ課